

## 個人的散文の物語性、歴史性、社会性： 清岡卓行「アカシャの大連」論

|       |  |
|-------|--|
| メタデータ | 言語: ja<br>出版者:<br>公開日: 2020-09-03<br>キーワード (Ja):<br>キーワード (En):<br>作成者: 土屋, 忍<br>メールアドレス:<br>所属: |
| URL   | <a href="https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1355">https://mu.repo.nii.ac.jp/records/1355</a>      |

# 個人的散文の物語性、歴史性、社会性

## 清岡卓行「アカシヤの大連」論

土屋 忍

### 同時代評から

清岡卓行「アカシヤの大連」は、『群像』一九六九年十二月号に掲載、一九六九年下半期には「朝の悲しみ」(『群像』一九六九・五)とともに、第六二回芥川賞を受賞する。芥川賞の選評——そのほとんどが「アカシヤの大連」を対象としているのだが——を見ると、三島由紀夫は、「愛すべき作品」であり「私は同世代としてよくわかるところがある。大連は心象風景であるから、外地であると同時に内地であり、「にせアカシヤ」の「にせ」に関する考察などに、この作家の心情が窺われる。当選作としてふしぎはない」としているが、石川達三は、「ほとんど全篇が個人的な思考を追う(哲学的随想)のようなかたちで、どこまで行っても平板な叙述であって、立体化されて来ない」と当選に「躊躇」を示している。また丹羽文雄も、「新風がない」

「小説的な野心もない思い出を語りつづけている。すこしごたごたしているから整理した方がよいではないか」という注文をつけている。瀧井孝作もまた「大方甘い詠嘆と感傷だけで、事物は何も描いてなかった」と、その内容に随想的平板さのみでとり批判している。舟橋聖一に至っては、「受賞作」アカシヤの大連「を私は買えない。私の知っている昔の大連の街のメカニズムは、もつと複雑で錯綜し租借地らしい文化と非文化の色彩が混濁していた」小説として物足りないばかりでなく、随筆としても、紀行文としても、思い出としても、もつと鮮やかな陰陽がほしい。詩人の書いた散文は、素直で感傷的だが、その散文が小説になる変り身の芸が足りない」と手厳しい。このように、「大連」が描けていない、「事物」が描かれていない、「小説」になっていないという批判がある一方で、井上靖は「人間関係が取り扱われていないので小説として物足りなさがあるという見方もあるが、これはこれでいいと思う。青春の感傷と

煩悶がこれほど美しく描き出された作品は、そうたくさんはない。まさに芥川賞に新風が吹き通った感じである」としているし、大岡昇平は「その清新な感受性と、作品の詩的な、もしくは音楽的な構成によって、現代の小説に新風をもたらしたといえる」と新しい小説の登場と捉えて「アカシヤの大連」を評価している。石川淳も同様にこの作品を推しており、中村光夫も条件付きで認めている。こうして評価がまっぴたつに分かれる中で川端康成は、もともと「消極的であつた」が、「委員中でも鑑賞のうるさ型の石川淳氏や井上靖氏や大岡昇平氏や三島由紀夫氏や中村光夫氏らが推すのだから、私の読み方が粗略であつたのか、過誤であつたのかと、反省させられるほかほなかつた」として、評価をした側の委員の意見をうけいれている。

石川達三が指摘するように、確かに「アカシヤの大連」には、個人的な思考を追うようなかたちの叙述が続いている。その意味で個人的な散文だと言えるかもしれない。それが「小説」になつているかどうかについては、選考委員たちそれぞれの小説観が反映された発言になつていふと思われ、興味深い問題ではあるが、ここでは立ち入らない。本稿では、「アカシヤの大連」には描かれていないともされた「事物」や「大連」が如何に描かれていふかをまずはみてとり、物語性、歴史性、社会性といった見地からの検討を試みたい。

## 「アカシヤの大連」の空間と時間

〈彼〉は、八年ほど前には会社員をしており、今は〈大学の語学教師〉に転職している。年齢は〈四十代も半ばを過ぎ〉ている。〈彼〉は、大連から東京に引き揚げてきたいわゆる引揚者であり、〈植民地二世〉である。引き揚げてきたのは〈二十一年以上〉前のことであるが、引揚げのタイムイングは、敗戦直後ではない。〈祖国の敗戦を体験し、そのあと三年もずると留ることとなり〉とあることから、引き揚げてきたのは一九四八年のことであろう。さらに明確には書かれていない語りの現在時を推測するならば、一九四八年から〈二十一年以上〉が経過した時点がそれと考えられるので、一九六九年以降、すなわちこの作品が発表されたのと同じ年（あるいはそれよりも少し未来）ということになる。（すこしごたごたしているから整理した方がよいではないか）（丹羽文雄）という言もあるが、確かに、語りの現在より回想される過去の時間と空間がやや入り組んでいると言える。丁寧に読めばわかることではあるが、念のためにここで時系列に整理しておこう。

まず〈彼〉は、大連に生まれ、幼年期少年期を過ごす。両親は高知県出身であり、南国土佐を彼は〈戸籍上のふるさと〉と呼んでいる。旅順に出来たばかりの高校に入学するが三箇月で退学。ランボーを原語で読む勉強ができる高校にかわりたいため）に、〈文学をやりたいため〉に、〈まるで父母とふるさとを、無情に捨てたかのような胸の疼きを覚え〉ながらも東京に移り、予備校に通う。やがて東京の高校に入学し、寮に入る。高校一年のときに野球部に入学し、その後休学し、高校二年のときに

学徒動員のため高知県に召集されるが、即日帰郷となる。大学一年生の三月に、〈抑えがたい郷愁にかられ〉て、病気でもないのに休学届を出して、ふたりの友人とともに、大連に舞い戻る。敗戦の五箇月前のことであった。その地大連で、〈文学好きの情弱の徒〉は、三年とどまり、結婚した。引き揚げたのは、一九四八年。大連のことはしばらく思い出さなかったが、一九六二年の冬（二月）の大連、一九六三年頃の秋の大連を断続的に思い出す。一九六八年頃には妻を病気で失い、やがて〈彼〉は語り始めることになる。

これらは、〈彼〉の語りの現在における回想の中で、過去の時間を往き来しながら語られていく。その内実は、直接的には大連にまつわる記憶である。回想を通して明らかになる〈彼〉の過去の時間を、〈彼〉の言葉を借りながら、本文で語られた順に番号を付してあらためて略記すると、①〈八年ほど前の冬〉↓②〈六年ほど前の秋のある夜〉↓③〈一年数か月前〉↓④〈一九四五年三月下旬から四月上旬へかけて〉↓⑤〈四月のはじめ〉↓⑥〈三月二十三日の朝〉↓⑦〈高校一年のとき〉↓⑧〈高校二年のとき〉↓⑧〈十九歳〉↓⑨〈中学一年生〉↓⑩〈小学校〉↓⑪〈五年ぶり〉の〈大連の五月〉↓⑫〈小学校の六年生頃〉↓⑬〈中学校の三年生のとき〉↓⑭〈五月の半ばを過ぎた頃〉（父は六十三歳で、母は五十九歳）↓⑮〈一九四五年七月〉↓⑯〈小学校の高学年〉〈中学生〉↓⑰〈誕生日が過ぎて二十三歳になっていた〉↓⑱〈八月六日〉〈八月九日〉〈八月十五日正午〉〈八月十五日の夜〉↓⑲〈終戦から一週間も過ぎ

た頃〉〈秋〉〈冬〉↓⑳〈敗戦から一年が過ぎて、また夏になっていた〉〈秋〉〈冬〉〈異様に寂しい春〉（一箇月あまり経った頃）〈次の日の夜〉〈それから五日目の朝〉となる。

したがって、〈かつての日本の植民地の中でおそらく最も美しい都会であったにちがいない大連を、もう一度見たいかと尋ねられたら、彼は長い間ためらったあとで、首を静かに横に振るだろう。見たくないのではない。見ることが不安なのである。もしも一度、あの懐かしい通りの中に立つたら、おろおろして歩くことさえできなくなるのではないかと、密かに自分を怖れるのだ〉という「アカシヤの大連」の冒頭の〈彼〉を、敗戦を契機にして故郷である大連を苦勞して引き揚げてきた日本人のひとりである、と捉えてしまうのは早計である。〈彼〉は、敗戦前に実家のある大連をあとにして東京の高校に進学しているのであり、その後は戦争を忘れるために大学を休学して、大連に戻っている。また、敗戦ですぐに日本に引き揚げたのではなく、その地にとどまり、結婚している。〈彼〉にとつての大連とは、〈幼年時代と少年時代を送った町〉であり、戦前から戦後にかけて〈実家のあった町〉であり、〈祖国の敗戦を体験〉した場所であり、〈結婚した町〉でもある。地図にはない地名。辞書や古地図にしか出てこない過去の地名をもつ故郷。しかし、一九四五年八月十五日を境にして〈植民地〉だった場所が解放地に変わり、そこでの日本人は敗戦国民として大変な苦勞を強いられたいというような、一般に流布されたような「物語」は〈彼〉の物語ではない。戦後しばらくしてから故郷である大連を懐かし

く思い出し、再訪する類の物語でもない。(彼の内側から、まるで数日おきの間歇泉のように、生き生きと浮かびあがってくる)大連の記憶の断片が集積されて描き出すのは、(いささか青春の匂ひがする物語)である。三人称によって語られるこの(大連)は、想起される過去の記憶の中にある場所であり、①②それぞれの際点の空間として表象される。そしてその表象の大部分は、(彼)が二十二歳のとき、④(一九四五年三月下旬から四月上旬へかけて)の(愚かしくも哲学的な旅行)という移動のなかで遂行される。④から②までは、基本的には一九四五年三月からの三年間の時間の流れを軸として語られており、その間には敗戦という出来事があるが、(哲学的な旅行)や妻となる女性との出会いのほうに、個人的にははるかに大きな比重を占めている。(生き生きと)語られているこれらの(いささか青春の匂ひがする物語)は、しかし妻を亡くした一年数箇月後、すなわち二十年以上経過した後には回想されているのである。

「哲学的な旅行」の際に(彼)が求めていたのは、(不在への憧れを象る瞑想の座)としての(空間)であり、かろうじて(選び取られた自由の領土)としての(密室)であった。そして、(永遠の中絶への憧れを象る瞑想の軸)としての(時間)であった。しかし、そのような(望ましい環境)とは異なり、旅行における空間と時間とは、(偶然に出会う沢山の生身の他人と、煩わしい無言の関係を結ばなければならない)ような(慌しさ)によって自己の喪失を余儀なくされる、(状況によってがんにがらめに捕えられた)としか認識できない空間であり、(持てあ

ました倦怠)に貫かれた(移動)を強いられる時間であった。大陸に着いてからの列車では、(空襲の心配がなく、学生に憎悪の視線を投げつける日本の軍人に出くわすこともあまりないので、(暢気)になることができた)とあるが、それは(旅の終り)の頃である。(地獄に近いもの)ともなっていた(旅行)が、(哲学的)と称されたのはなぜだろうか。

### 〈矛盾〉の変容

(哲学的な旅行)は、多様な位相における(矛盾)の認識において(哲学的)となる。それは第一に(自他の利害のどうしようもない矛盾)として立ち現われ、次に(甘美な死)と(凄惨な死)という(二つの死)において認識される。(甘美な死)とは(求められる)ものであり、端的に言うると⑦(高校一年)の頃から抱き始めた自殺への憧れである。(無拘束)を保証するものであった。それに対して、(凄惨な死)は(拒まれるもの)である。(観念において逆説的にはぐくまれるものではなくて、言葉の本来の意味における死、凄惨な事実において襲いかかってくる死、つまり、人間が本能的に拒もうとする肉体の消滅)である。それは、二十二歳の(彼)が今まさに乗ろうとしている関釜連絡船が、ときどきアメリカの潜水艦に撃沈されているという事実を下関の地で知り、ストリートに感じた(最も平凡な死)である。現代の読者は、東京から下関に移動し、下関から釜山に渡り、朝鮮半島を経由して大連へという当時の日本の

版図内の移動が、ある意味では今より合理的かつ便利であったことと、そうであるからこそ版図外より狙われ危険であったということの双方の意味を把握しておく必要があるだろう。当時二十二歳であった〈彼〉の中において、〈最も平凡な死〉に対する〈生々しい恐怖〉は、甘美な死への憧れと同居していた。

〈彼〉の矛盾の認識は、さらに、⑦（高校二年のとき）にも遡る。そのとき彼は、学徒動員で召集されるが即日帰郷になっている。この即日帰郷の理由は判然としないが、休学中であったことが関連しているようだ。休学中であったため〈肺の病気〉とうけとめられ、レントゲンも撮られずに即日帰郷を命じられたのだらう。こうして学徒動員における即日帰郷に際しても、誰にも明かすことのない〈勝利の秘密〉を嘔みしめる〈誇らしさ〉と、それとはうらはらな〈罪の戦慄のようなもの〉とを同時に含み持つような〈矛盾する味わい〉が〈彼〉の中に去来するのである。

〈二つの死〉をめぐる矛盾と〈即日帰郷〉をめぐる矛盾は、いずれも戦争という現実に対する反時代的な感性と、時代を超えてある種の若者に共通してみられる感受性とが実に微妙な形で配合されて生まれたものである。今、戦争に対する反時代的な感性と述べたが、戦争で殺されることへの恐怖と言い換えてしまえば、戦後の平和な世においては当たり前の感覚かもしれない。しかし、その感覚には〈罪の戦慄〉がともなっていることに留意する必要があるだろう。三島由紀夫が選評で、「私には同世代としてよくわかるところがある」としたのは、思わ

せぶりなどではなく、彼もまた即日帰郷組だったからだろう。また、清岡卓行自身が「吉本隆明の詩」の中で、「戦争世代のなかでどのような存在を最も信頼するかと言えば、本能的に返ってくるその答えは、たとえば吉行淳之介のような戦中文弱派だということである」と記しているのは、吉行淳之介が「戦中少数派の発言」（『東京新聞』夕刊、一九五六年四月十日、十一日連載）や『焰の中』（新潮社、一九五六・十二）などに描いた戦争に対する感受性に、生理的同質性や死生観の近似性をみてとったからだと思われるが、吉行淳之介もまた「即日帰郷」だったことを表明していたのを忘れてはなるまい。清岡は、同じ文章で「どのような時代にあつても、（…）一貫して文弱派であるということほど素晴らしいことがあるだろうかという、密かな思いをも、ほくは抱いているのかもしれない。しかし、自分と異質であるどのような存在に最も激しい関心を抱くかと言えば、それは、やはり、吉本隆明のような人間である」と続けているが、ここにも二律背反的心情を率直に打ち出す姿勢と止揚や妥協による一元化を拒む姿勢がみられるということになる。

〈二つの死〉と〈即日帰郷〉のくだけり（だけ）は、〈おれ〉という一人称の独白によって語られる。それは内面の核に触れる部分であり、〈彼〉という三人称では語ることが難しかったからかもしれない。即日帰郷のあと、〈おれ〉は悩むことになる。そして、矛盾という言葉こそ用いていないが、〈おれ〉は、〈被害者であつて同時に加害者であるという、変な具合に二律背反的な意識が、芽生えてきている〉と独白する場面が続き、相反す

るふたつの意識を同時に抱える矛盾についての自己言及がみられる。ここでの〈被害者〉意識とは、〈厭戦的な気分や行為〉を基盤にした対〈国家や社会〉意識である。また〈加害者〉意識とは、戦士となつて戦場に赴いている〈おれと同じような人間〉や、〈ニュース映画〉で見た〈特別攻撃隊員〉に対するものである。後者に関しては、〈戦争に行かないで生きながらえている〉自分が、〈戦争の共犯者〉〈戦争体制への協力者〉に感じられてくるという意味での加害者意識であり、植民地を含む〈外地〉への「侵略」の責任をひきうけようとするものではない。したがつて、成田龍一によつて一九六〇年代後半から力をもちはじめるとされる、戦争の語り方における加害者としての「われわれ」とは主体のあり方が異なる。むしろ、アジアへの謝罪の前に自国の死者への弔いをすべきであるという『敗戦後論』(加藤典洋、講談社、一九九七・八)の主張と通じるものがある<sup>1)</sup>。

さて、語り手は三人称に戻るが、〈矛盾〉をキーワードとした語り、様々な位相の〈矛盾〉に満ちた〈哲学的旅行〉は、その後も続いていく。東京で高校の寮にいれば、大連の家庭が恋しくなり、大連に戻つたら東京で新しい研究かなにかを無性にやりたくなるといふ〈矛盾〉などが語られるのだが、〈彼〉によつて認識される〈矛盾〉の中で最も重要なのは、〈大連という都会における〉〈矛盾〉であろう。それは、同じ都会の中で、〈優雅とも言える綺麗な部分と、恐怖をも誘う汚い部分が共存〉しているのは世の常ではあるが、それが、大連においては、前者が日本、後者が中国といったように明確に〈民族のちがいに対応〉

しているといふ〈矛盾〉であった。ここで注意が必要なのは、ここでの大連表象には三つの時間の位相が絡んでいることである。一つは⑫〈小学校六年生〉のときの〈彼〉の目に映つた大連。もう一つは、二十二歳になり東京から大連を訪れた〈彼〉が、小学校六年生のときに見た大連を思い出し、大学生の頭で考えた大連である。さらに、語りの現在時における四十半ば過ぎの〈彼〉が語る大連がそれらの外枠としてある。

二十二歳の〈彼〉は、都会における対称的な〈美醜〉の共存を〈もはや肯定することができない事実〉と認識し、それが〈民族のちがいに対応〉していることを〈許すことができない野蛮なことのよりに〉感じる感性をもつことができたが、中国人居住地の〈惨澹たる有様〉を眺め、共同便所で「打倒日本」といふ文字の落書を見た小学校六年生の〈彼〉の目には、〈怪訝ながらも異様なだけの眺め〉でしかなかったとされている。大連埠頭において見られた苦力の労働が、〈日本人とは差別された実に安い報酬によるものであるといふことを、そのときの彼は知らなかった〉ともある。〈そのときの彼〉とは、二十二歳の〈彼〉で、搾取の実態を知っているのは四十半ば過ぎの〈彼〉であろう。しかし、そのような二十二歳の〈彼〉も、〈そうした現実の光景が、王道楽土と、日・満・漢・蒙・鮮の五族協和を讃える、満洲国の表面上のスローガンとは、まったくくらはらなものであるといふことだけを感じていた〉。続く〈関東州は日本の租借地で、満洲国とはまた別なものだからという理由があるとするれば、それはかえつて、日本の植民地における残酷さ

について、語るに落ちる証明をすることになるものだろうかと思つた)の箇所は、判断に迷うのだが、二十二歳の(彼)の認識なのだろうか。四十半ば過ぎの(彼)の見解なのだろうか。関東州は日本の租借地であるが、中国からの租借地であつた。それが(満洲国)成立後は、(満洲国)の一部とみなされ、関東州は(満洲国)からの租借地となる。(満洲国)には満洲国籍の満洲人が誕生したが、それは漢民族や満州族、モンゴル族に限られており、満洲在住の日本人と朝鮮人は、満洲国民としての特権を享受しながら、義務に関しては日本国民として治外法権などの特権を得ていた。まさに国籍法のない、筋の通らない「国家」であり、(矛盾)という言葉によつて語られるにふさわしい時空間であつた。二十二歳になつた(彼)がそうした現実を(矛盾)として認識したとしても不思議はないが、(残酷)な(日本の植民地)という認識についてはどうだろうか。三島由紀夫のように大連を「外地」とする認識は、戦前からの語法を引き継ぐものであるが、「統治地」「占領地」なども含めた呼び名であるので、「植民地」よりも範囲が広く、負の価値をほとんどもたない用語であり、意味も茫漠としていて使いやすい。しかし、戦前において、満洲とは(租借地)であり(満洲国)は(国家)である。朝鮮はいわば「併合地」であり、台湾は「領有地」であつた。これらを一括して(かつての日本の植民地)として括る認識は、戦後、各地で起こつた民族自決の独立運動などを通して対象化されたものであり、少なくとも(植民地)における残酷さ」という負のイメージを帯びた価値観や認識が一般

に浸透したのは、戦後のことなのである。

いずれにしても、民族の違いを超えた新しい世界の建設、(五族協和)がスローガンであつたはずの(満洲国)において、それとは(うらはら)な民族差別の実態が、大連に暮らす小学生の目には異様なものとして記憶されており、二十二歳の大学生の目には、はつきり矛盾として見えていたのであつた。また、四十年代半ば過ぎの(大学の語学教師)は、一九六〇年代後半に浮上した旧植民地に対する加害の問題を否定せず、しかしそうした「われわれ」を主体とする語りの文脈に沿うこともなく、あくまでも一人称と三人称の単数によつて語ることを選ぶのである。(おれ)と(彼)の想像力は、同世代の特攻隊員や兵士には届くが、基本的には(おれと同じような人間)、すなわち自分と同じような厭戦家、(矛盾)をどこかで感得していた者たちに対して働かされる。この想像力が(民族)を越境して作用しないのは、(五族協和)が実態をともなつた現実として見えたことがなかつたからであり、そのような現場を(望みながらも)経験することがなかつたからであらう。そして、(戦争を心から憎悪していた)母をもつ(彼)が戦争を賛美する愛国者だつたことはなかつたため、そのような意味で戦後になつてからことさら反省する必要性を感じなかつたのであらう。大連という都市空間が、(歴史的に見て、ふしぎに平和に恵まれた)場所であつたことを、(ずっと後になつてから知るのである)としているし、(飢えの雰囲気)もなく、内地では入手困難な食糧品も嗜好品も、(親しい中国人に頼めば、ほとんどいくらでも買うこと



ができた。〈戦争中におけるこれらの安楽について、その代償を支払うかのように、大連にいた日本人たちは、やがて敗戦後の引揚において、財産や職業のほとんどすべてを無残にも失わなければならなくなるのである〉と付け加えるのを忘れてはいないが、彼の共感はそのこにはない。

二十二歳の〈彼〉が、戦時下の〈哲学的な旅行〉を経て、戻り、辿り着いた大連は、あらゆる〈矛盾〉を抱える場所であったが、そこはまきれもない、そしてかけがえのない〈ふるさと〉であった。とりわけ⑩〈五年ぶり〉の〈大連の五月〉には、〈幼年時代や少年時代には意識しなかったその美しさ〉に〈彼〉が驚き、〈久しく忘れていたアカシヤの花の甘く芳しい薫〉に〈彼は心を激しく打たれたのである。それは二十二歳の〈彼〉の再発見にとどまらない。語りの現在においても、二十数年ぶりにあらためて思い出されることにより、ふたたび再認識されているのであり、〈大連という都会における、このような矛盾のすべてにかかわらず、彼は南山麓をはじめとするさまざまな場所を、切ないような苦しさで愛さずにはいられなかった〉のは、四十半ば過ぎの〈彼〉でもある。そして、〈なぜなら、彼が生れて、幼年時代と少年時代を送ったところは、その植民地以外にはなかったからである〉と続ける語り手は、自己を〈彼〉という呼称を通して対象化しようとしているのである(どの時点での〈彼〉の言葉なのか定かではないところもあるのだが、この箇所数行の前には行空けがあり区別されているところからも、「植民地」という言葉を突き放して用いているところからも、そ

のように判断できるだろう)。

旅行中に生まれ、大連で育まれた彼の憂鬱の哲学〉は、⑩(二十三歳)を迎えたとき、〈変化〉を見せはじめ、〈ある落着き〉が芽生える。〈同一の人間によって、求められる甘美な死と、拒まれる凄惨な死〉は、〈彼〉個人の内部において分裂して意識されていたが、そうした矛盾を一元的に理解することも可能であると把握されるようになっていくのである。それは結局、〈戦争によって殺された優しく向日的な希望も、宇宙へのささやかな悪意として行われた自殺も、死体としては全く等しいということに慄然として思いあつたからであ〉り、止揚や妥協や選択による一元化とは異なる理解の仕方であった。

### 〈女〉〈アカシヤの花〉〈ふるさと〉の変奏

〈彼の憂鬱の哲学〉は、〈甘美な死〉に向かう〈暗い情熱〉を、〈夢であることを知りながらなお見つづける強烈な夢〉に譬えることによつて、つまりそうした知的な操作によつて(二応の安定)を得るのだが、安定化をもたらしたものが〈知的な自己考察〉であったとするなら、〈それはおそらく真実の半分しか語らないことになるだろう〉としている。安定化の要因を完全に把握することは難しいが、〈少なくともその真実の近似値を求めるための分析はできるだけ加えなければならぬ〉としたうえで、〈幻想的な女のイメージの出現〉が、〈甘美な死〉への衝動を感じたときに〈自分を引き留めるように作用〉するようになった

ことを告白する。〈彼〉にとつての女のイメージと言へば、ごく幼い頃の記憶として、〈毎朝歯を磨くときに眼にする、歯みがき粉の袋に色刷りされた女の顔〉があつたが、それよりも〈幻想的な女のイメージ〉は〈官能的〉であつた。〈歯みがき粉の袋の色刷りの女〉の顔が夕焼け空に〈ポツカリと〉浮かぶのを眺めた遠い昔の記憶は、二十二歳の〈彼〉が日没の大連を散歩の途上、弥生ヶ池のふちでベンチに腰をおろして一休みしているときに不意に甦り、そのとき、何の脈絡もなしに〈召集が実際にやってくるまでは、戦争のことは一切忘れよう〉と決心する。

〈戦争を一応忘れてしまへ〉という啓示と結びつくように浮かんだ〈歯みがき粉の袋の色刷りの女〉は、〈一層若若しい裸体〉の〈幻想的な女のイメージ〉へと変容し、〈彼〉を現実の生の側に引き寄せる。ここで女のイメージは、〈二つの死〉のそれぞれを忘れよう（目を瞑ろう）とする意志と深いところで結びついていることになるだろう。つまり、〈歯みがき粉〉の女の記憶は、戦争によつてもたらされる〈凄惨な死〉をしばし忘れようとい決心するきっかけとなり、〈幻想的な女のイメージ〉は、〈甘美な死〉への衝動を抑えて現実の生に向かわせる原動力のひとつになつていたのである。忘れようという意志に関しては（後からも詳述するが）、〈ふるさとは、忘れることができる〉という〈彼〉のことばと、〈本物のアカシヤ〉と〈にせアカシヤ〉の比較しながら花（花房）の比較には目を瞑るところにも現れている。この〈ふるさと〉と〈アカシヤ（の花）〉をめぐる執着と意図的な忘却に関しては、やがて〈女〉の表象とかわる形で物語結

末を迎えることになる。

前述のように、〈女〉の表象は、イメージとして出現してきた。また〈彼の席の近くにたまたま坐るかもしれない魅惑的な少女の姿〉は、〈憂鬱の哲学〉と結びつくような〈彼の暗い情熱〉から発せられる〈微かに甘美な味わい〉にも敵わないものの代表として語られていた。しかし、この〈不定形な女のイメージ〉は、にわかに具体的な形をもつた女性として焦点を結ぶようになっていく。

すなわち、〈彼〉が戦後の大連で結婚することになる女性の出現である。その女性に出会つた時の印象は、〈円顔で、甘い感じ〉であり、〈その二十歳の匂やかさ〉は、〈いくらかさびれている広場の中に、ふしぎな花がポツカリと咲いたような感じであつた〉と回想されている。彼女の出現は、〈憂鬱の哲学〉を〈不定形な女のイメージと自殺の可能性の意識による生への傾き〉が、なお優勢を保つ甘美な死への傾きによりやく拮抗したまま進展しなくなつていた、あの心の中のドラマと簡潔に整理しつつ、久しく忘れ去つていたあの懐かしい〈憂鬱の哲学〉としてふりかえる余裕を〈彼〉に与える。そして、〈彼は、アカシヤの花が、彼の予感の世界においてずっと以前から象徴してきたものは、彼女という存在であつたのだと思うようになっていた〉とさえ語るようにまでなる。

ここで念のために確認しておきたいのが、〈花〉の表象方法である。彼女のことを〈ふしぎな花がポツカリと咲いたような〉と形容した時分には、〈アカシヤの花の開く頃になつていた〉と

あるが、〈白い薑〉の存在しか伝えられていない。〈彼〉と彼女が〈デパートのケース〉の中で一緒に働くことになったのは、〈大連のアカシヤの花ざかりの時節〉と記されているが、しかしその花の直接の描写はない。⑬〈中学校の三年生〉のとき、〈彼は、学校の博物の授業で、先生から大連のアカシヤを〈アカシヤ〉と呼ぶのは俗称で、正確には〈にせアカシヤ〉ということをお教わったという。そのとき、大連にも二本だけある〈本物のアカシヤ〉と、それまで町の人々がアカシヤと呼んでいた〈にせアカシヤ〉を比べて、〈にせアカシヤ〉のほうが美しいと思う。そのことを二十二歳の彼は、そこで咲き乱れた〈にせアカシヤ〉の花を見ながら、思い起こし、〈義憤〉にかられる。しかし、注意深く読むと、〈本物のアカシヤ〉の花は見ていないことがわかる。〈彼〉は、〈にせアカシヤ〉を〈アカシヤ〉と比較して〈にせアカシヤ〉の美しさを語りながら、そしてその花の美しさを強調しながら、〈アカシヤ〉の花は見ていないのである。<sup>20</sup>

そうした空所は、おそらく彼女のために用意された場所なのだろう。〈本物のアカシヤ〉の花、本当の〈ふるさと〉は、在り得べき存在として示されながらも表象されず、空所として残されてきた。だから最後の最後に、〈アカシヤの花が、彼の予感の世界においてずっと以前から象徴してきたものは、彼女という存在であったのだと思うようになっていた〉と語るときの〈アカシヤの花〉こそが、うしろめたさを感じずに（社会的には控えめにはあるが個人的には堂々と）語れるような〈本物のアカシヤ〉の花なのである。そしてこれは、〈言語のふるさと〉で

はなく〈風土のふるさと〉であると限定的に語ってきた〈大連〉表象にも変化を及ぼしており、戦後において思い出される〈植民地〉大連のイメージの中心にもまた彼女が〈予感〉として存在することになる。あらかじめ〈予感〉された〈アカシヤの花〉の開花こそが彼女という存在の登場を〈予感〉させており、戦後になって登場した彼女の存在こそが矛盾しない本物の〈ふるさと〉大連となつて〈彼〉の中に定着したのである。

### 個人的散文の歴史性と社会性

みてきたように、「アカシヤの大連」という個人的な散文をつぶさにみていくと、物語性を読みとれることがわかった。結末部のみわかりやすい物語が集中しているかのような印象もあるが、しかしそれは、結末部に描かれている、結婚することになる女性との出会いを起点にして、その前後四十年の記憶を語るために冒頭より周到に準備されたイメージの複合体から導かれた結末であった。

語りの現在である一九六〇年代後半と、〈哲学的な旅行〉を敢行した一九四五年に関しては、同時代言説を念頭においた若干の考察をすでに加えてきたが、以下、これまで触れなかった作品の細部に刻印された断片の意味をその歴史性と社会性という観点より考察してみたい。

①〈八年ほど前の冬〉は、最初に〈大連のなにか〉が、〈色あざやかに浮かびあがって〉きたときである。〈彼〉がまだ会社員

をしていた頃で、妻と子供たちと楽しく暮らしていた。その（隙間に、過去が生き生きとよみがえってくるという）ことは、なぜかしらほとんどなかった」と断ったうえで、例外のひとつとして紹介されている。

（小学生の長男）との約束を果たすため、デパートの文房具売り場で地球儀を物色していたところ、一つの地球儀が、偶然、（昔の大連の場所を彼の眼の前につきつけながら、回転をやめたのであった）。本文に書かれていないことをあえて補足するなら、（八年ほど前の冬）にデパートで売っている地球儀に「大連」の文字はない（一九八一年三月に「大連」という地名は復活するが、まだ当時は「旅大」である）。ここで（彼）の胸に去来したのは、あくまでも（昔の大連の場所）である。都市名とともに周囲の地理的呼称が変更されている場合は多いが、地図上の地形も位置も大きく変わることはない。大連の学校で習ったとおりの位置に、覚えていたりとおりの地形がそこにはあった、ということになる。〔北緯四十度、東経百二十度のあたり。黄海の北の方。渤海湾と西朝鮮湾には含まれる、小さな半島の突端。いかにも天然の良港にふさわしい図形〕に（彼の視線）は釘づけにされていた。こうして（遠い過去の土地へのノスタルジー）が、（彼の胸に自然にこみあげて）くることになるのだが、八年後の現在の（彼）の自己分析によれば、（アルジェリアの独立の問題が新聞やテレビのニュースを賑わしていたという）ことが、無意識のうちに関係していたかもしれなかった」という。

ここでも本文に直接書かれていないことを付け加えるなら、ここでの（小学生の長男）が、読者には大連で出会って結婚した女性との間の子供であることが推測できるはずであり、さらに本文を最後まで読んだ読者には、（小学生の長男）が植民地を知らない植民地三世であることがわかるのである。（彼）と（彼の妻の故郷は（植民地）大連であるが、東京で生まれ育った息子が、両親の故郷である（昔の大連の場所）をいつか訪れることは可能だとしても、（植民地）大連を訪れることはできない。地球儀は、息子に地理を教える約束をしたために購入することになったものである。息子に地理を教えるということは、日付変更線や赤道のような不変の概念を教えるとともに、記憶の中の心象地理とは異なり、戦後にはじめて画定された地政学的概念に基づいて教えなければならないということでもある。（彼）は戦後の地球儀を使ってどのようにして（大連）を教えるのだろうか。

「アカシヤの大連」のような作品が生れたことの意味のひとつは、単純に言えば、次の世代に語り継ぐ言葉の模索ということであろう。植民地二世から植民地三世へと語り継ぐ物語、植民地二世の世代から植民地三世以降の世代へと語り継ぐ歴史。本作でそれは、「われわれ」を主体とする語りではなく、（植民地二世）を自認する（彼）や（おれ）の語る個人的散文においてなされている。「アカシヤの大連」の言葉は、作者から読者へとという地平を飛び越えて、父の立場から自らの息子に語りかけ、母の存在を教えるものとしても存在するとともに、事件の報道、

交通機関や学校のような公的機関、都市の光景の一こまなどを描き出し、その歴史性や社会性を断片において刻印し、断片をして時代を語らしめるのである。

さて、作中での〈彼〉が聴いたラジオが伝えた内容は、――パリ九日発。フランスのド・ゴール大統領のアルジェリア政策が支持されました。フランス本土で七十五パーセント、現地では中間報告によりまずと六十パーセントの賛成票を獲得しました。しかし、棄権者も多数にのぼる見込みです……である。

ド・ゴール大統領がアルジェリアの独立を正式に承認したのは、一九六二年二月五日のことであるが、アルジェリア独立をめぐる国民投票で、アルジェリアの民族自決（ド・ゴール大統領のアルジェリア政策）が七十五パーセントの支持を得たのは、一九六一年一月八日のことである。したがって、この〈パリ九日発〉は、一九六一年一月九日のことであるとほぼ確定できる（ここから、語りの現在が一九六九年頃であるという推定も生まれる）。

〈彼〉はまず、アルジェリアで生まれ育ったフランス人の子弟のことを連想し、〈ふしぎな親しみ〉を覚える。そして、フランス映画でも見たことのない〈青春のドラマ〉を初めて想像し、そうした〈青春〉に語りかけてみたい衝動を感じる。そのとき口をつけて出そうになったのは、〈きみたちは早くフランスの本国に帰ったほうがいいよ、頑固な親たちを説得するのは大変だろうけれども、あの光栄ある伝統の国へ戻ることに、何の支障もないではないか、ふるさととは、忘れることができるものな

のだ……〉という言葉である。中国東北部にいた日本人は、敗戦により、大きく環境が変ることになる。ソ連軍や中国共産党の八路軍、現地の人々に追われるなどして、旧植民地を後にして「祖国」に逃げ帰らざるを得なかった者たちもいた。しかし、同様にアルジェリアにいたフランス人は、戦勝国民として、戦後も植民地経営を継続した。〈彼〉は、大連で育った自分が日本本国に戻ったように、アルジェリアで育ったフランス人の子弟もフランス本国に帰ればよいのではないかと問いかける。植民地にこだわるな、と言っているのであるが、ここで注意したいのが、〈彼〉の言葉は、植民地で生まれ育った植民地二世に向けての問いかけであり、植民地一世に対してではないということである。植民地一世は〈ふるさと〉を日本本国としながら植民地経営に携わってきた〈頑固な親たち〉である。植民地を（生れふるさと）とする植民地二世とは異なる。そもそも戦争に意味を見出したことのない〈彼〉の意識の中に、そして、生まれたときから植民地で生を育んだ〈彼〉の身体感覚の中に、植民地主義批判という戦後的文脈は存在し得ないのである。だからこそ、戦後に継承された植民地に対してはあつさり否定できることはできない。できるのは、〈忘れること〉だけなのだ。

〈ふるさととは、忘れることができる！〉という遠く離れた他者に向けての暗示的なせりふは、まもなくそれを語る〈彼〉自身に向けられるようになり、〈自分にとつてふるさととは何であったのかと、鋭い痛みをともなう思いに駆られ〉る。昭和十

年前後、あるいは一九三〇年代の「故郷喪失」の問題系は、異郷においてこそ思い出す故郷という構図の発見という前史を経て、関東大震災以後の東京の変貌や近代化にともなう農村や地方都市の変貌、海外進出に付随する新たな故郷創出といった現実を背景としながら、「文学のふるさと」を、西欧文学の受容基盤に見出そうとしたり、古典や伝統に再発見しようとしたり、普遍的で根源的場所として、あるいは現実には存在しない憧れのイメージ空間として表象しようとするなどの動きを生み出してきた。それに対してここでの〈ふるさと〉は、一九六〇年代において、戦後における故郷喪失という現実を前提にしながら、昭和十年代、あるいは一九三〇年代―一九四〇年代半ばにかけての時間を丸ごと対象化し、個人的記憶の中に沈潜する〈青春の匂ひがする物語〉として回想することにより初めて浮かびあがるような場所として存在する。その場所はまぎれもなく〈植民地〉であり、否定されるべき存在である。それを語り手も充分に認めているのであるが、戦前における植民地と戦後における植民地とをどこかで峻別し、そして戦争については一貫して厭うことによって、過去の〈植民地〉を救い出そうとしているところがある。

② 〈六年ほど前の秋のある夜〉にもまた、〈外部におけるなにかしら偶然の現実〉が、〈彼の心の最も奥底にあるなんらかの問題にまでたどりつき、昔の大連の久しく忘れていたいろいろな思い出〉を〈生々しい懐かしさ〉をもって甦らせるような出来事があった。

野球場で試合中に渡り鳥アカエリヒレアシギの一群がきて、試合が中断したのである。そのとき、不運な数羽が落下して死んでしまう。そのうちの一羽を場内整理員からもらいうけた〈彼〉は、死骸の重さを感じながら、〈ふしぎな懐かしさ〉を抱き、〈ある種のいさぎよさ、ある種の愚かさ〉を想う。そこからさらに、〈少年の日のある出来事〉が想起される。中学校二年生のときに学校の教練で習ったばかりの知識で小銃をもてあそび、引金をひいてしまったのである。アカエリヒレアシギの死は、〈自殺ではなかった〉が、引金をひいてしまった自分が死んだ場合には、〈自分の死は自殺とされたらどうか、それとも事故死とされたらどうか〉と考える。

渡り鳥の境遇は、彼のような故郷喪失者の立場と重なるし、さらに、ここでの死のイメージはその後の死をめぐる哲学的追想につながる。また、戦時下において、しばしば戦争のことを忘れて生きようとしていた〈彼〉ではあるが、そうは言っても軍事教練はあり、銃をもつ機会があったのであり、その戦時下という時代には、いつでも突発的な死が控えていたのである。戦後日本の平和な社会からふりかえってみると、その異常な日常が感じられる。まさに、渡り鳥という自然界の移動を妨げ、命を奪う野球場という人工的な空間が、自由な移動ができずに苦しむ一九四五年の春における〈彼〉の境遇と重なるのである。

こうして、〈平生は、四十代も半ばを過ぎた大学の語学教師である彼の、遠い生れふるさととは、記憶の底に深く眠っていると云ってよかった〉はずだったのだが、〈彼〉と〈ふるさと〉の関

係は、(妻を病気で失)ったのをきつかけにして様子が変わり始めることが、あらかじめ述べられる。そこから(妻)になるはずの女性と出会うまでが回想されていくのである。

前述したように、この(妻)こそが戦後の(彼)にとつての(大連)であり、(アカシヤの花)であり、本物の(ふるさと)であった。しかし、それだけが(青春の匂ひのする物語)ではない。密室の中で味わつた(書物の中の散歩)もまた(青春の匂ひのする物語)である。詩を生み出す地としての歴史性をもつた(大連)という土地への愛着は、(知的な自己客観化)と(不定形な女のイメージ)によつてかろうじて(甘美な死)をその対極で支えることができるようになったのと同じ頃、(彼)が二十三歳になった頃に、浮上する。

(夢のうちの奢の花のひらきぬるだりにの市はわがあそびどころ)、『うた日記』という森鷗外の短歌を引用して、(彼)はまず激しく共感する。とりわけ(夢のうちの奢の花)という(きらびやかな言い廻し)に魅かれ、二種類の解釈を示す。ひとつは、帝政ロシアにとつての(素晴らしく花やかな都会)という意味(ダルニーはロシア語であり当時の呼称である)、もうひとつは、(まだ日本においてこれから満洲に向かおうとしている)鷗外にとつての(個人的な予感の夢のうちに見た華美の都会)という意味である。そして、鷗外の意識に即するならば前者が正しく、無意識を問題にするならば後者も正しいだろうと考え、どちらかというと後者の捉え方のほうが好きだと記している。また、「奢の花」は、彼のイメージにおいて、アカシヤの花と

二重写しになった)ともしている。よつて、ここでの引用が、作者が詩人であるので同じ詩人が大連を詠んだ作品を紹介するためになされた、として終りにするべきではないだろう。二種類の解釈はそのどちらも(彼)の(大連)として作品全体に書き込まれており、とりわけ(個人的な予感の夢のうちに見た華美の都会)における(予感)は、(アカシヤの花が、彼の予感の世界においてずっと以前から象徴してきたものは、彼女という存在であつたのだと思うようになっていた)と終末部で語るときに用いている(予感)と呼応しており、(奢の花)はもちろん(アカシヤの花)に呼応している。(夢)もまた、作品の末尾で語られる(いつのまにか、彼女と結婚することを夢みるようになっていた)(荒廃しているかもしれない戦後の日本で、どんな新しい生活が始まるか、彼はさまざまな夢を、彼女に喋つてみたくつた)というときの(夢)とつながる。さらに『うた日記』から「大野縫殿之助」をひいて示しているのも、(その詩がゆくりなくも表現している、戦火を免れた大連の平和な姿)であり、導いているのも、旅順の男性的なイメージに対する大連の女性的イメージである。それらもまた(彼女)の出現の予感をイメージさせる充分な伏線になつていたのである。

引用されているのは鷗外の(詩)だけではない。大連で編集発行された同人詩誌『亜』(一九二四—一九二七)の短詩運動の新しい、先端性、花やかさを高く評価し、偏愛する(彼)は、その中心に安西冬衛を据えて、彼の詩(てふてふが一匹韃靼海峡を渡つて行つた)を引用する。そして、形式的には、伝統的

な短歌や俳句の凝縮性に通底する口語自由詩であり、内容的には、巧まざる単純な国際性がみられるとし、この詩は大連から生まれているが、その詩の発想も、大連という土地があつてこそ生まれたものであるとする。また〈大連の桜花台という高台の住宅地〉に住む安西冬衛は、〈詩的独自性をその地盤から祝福されて、他の誰にも劣らないくらい大連の町を切なく愛した日本の詩人〉であつたとの判断を〈勘〉と断りながらも示す。さらに、安西が戦後に書いた文章を引用し、五月の大阪中之島公園で白い花総垂らしたアカシヤに遭遇し、大連時代を想起しはげしい郷愁にうたれた経験を述懐している箇所を紹介している。

『亜』における〈凝縮された国際性〉は、おそらく「アカシヤの大連」が目指したものであるのだろう。大連という街を愛し、追求すれば、それがどれだけ個人的なものであつても、国際性を同時にもつとすることを確信していたのではないだろうか。〈風土のふるさと〉はあつても、〈言語のふるさと〉としての大連は、過去にも現在にもどこにもないという〈矛盾〉を自覚しながら、日本語による国際性の獲得という夢を見ていたのかもしれない。

「アカシヤの大連」は、日本と中国の間はまだ国交がない時代に発表されている。わかりやすく言えば、当時大連に行くのは今日平壤に行くよりも難しい時代であつた。しかし、そのような時代に発表されたことにのみ意味を限定させるのも間違いだらう。戦地のことも植民地のことも直接は知らないが、戦争や引揚げの苦勞話や植民地支配に対する責任追求、極端な反戦論

と好戦論ばかりを聞かされている現代の読者にとつては、悩みながらも最終的には自己を肯定するこゝろした個人的散文を通して、歴史や社会について考えるほうが入りやすいということもあるのではないだろうか。この物語は、妻の死という「不幸の発端である幸福」(清岡卓行「制作のモチーフ」) (講談社文芸文庫版「アカシヤの大連」一九八八・二)を、過去に遡つて歴史的に位置付ける試みを内包しているが、この「幸福」が敗戦前後といういわば国民の不幸の時代に訪れているところに意外性がある。逆に「不幸」にしても、高度経済成長のまつただ中の「不幸」である。すなわち、東京オリンピックから大阪万博に至る一九六〇年代から一九七〇年にかけては、二回の反安保闘争があり、ベトナム戦争(反対運動)があり、それにもなう特需があり、「自由化」を経て海外旅行が大衆化に向かい(一九六四年)、まもなく国民総生産(GNP)が第二位となり(一九六八年)、国民レベルで経済的豊かさを享受できるような時代における個人的な「不幸」であつた。そこにはある種の均衡が見いだせるのである。

最後に、作中の一九四五年の描写について言えば、⑱(八月六日)〈八月九日〉(八月十五日)という時をしっかりと刻んでいる。そして、日本人がその植民地で敗戦をどう経験したかということについて、引揚げの〈無残〉を含めて、大連の場合を慎重に説明している。そして次のような認識を表明している。

そのときの大連は、日本人たちにとつて、いくつかの民



族が交錯する、ある意味でロマンチックな生活の場であつた。日本人たちは、虐げられる立場におかれたおかげで、はじめて他民族の存在というものにはつきり眼覚め、むしろ思いがけない人生の臨時休暇を味わつたのであつた。もし、同胞の生活困窮者への充分な対策などがあつたら、それはお互いに、どんなに金を積んでも、二度とは味わえない、面白い体験であると言つてもよかつただろう。

一九六九年に発せられたこうした言葉の意味は、戦争も植民地も知らない、当時大学生だつた世代の読者にどれだけ伝わつたのだろうか。見えない仮想敵との暴力的な闘争と自己否定と「総括」に明け暮れた運動家たちには、あまりにも甘つたるく映つただろうが、本当の意味での非戦、非植民地主義といったものを模索するには、戦争や植民地の豊かさや魅力と魔力を認めるところからスタートしなければならぬ。私たちは、いつだつて「戦争」や「植民地」に巻き込まれているのである。その意味で、多くの運動家たちが、まもなくみずからが批判して来た相手の側の尖兵となり、経済界のみならず言論界や芸術界、学会でも「バブル」が起こつた際には、韜晦と諧謔を担保しながらそれぞれの場所の中心で働くことになるのは、まことに象徴的であつた。

## おわりに

一九六九年に発表された清岡卓行の「アカシヤの大連」は危険なテキストである。

なぜならそれは、植民地の魅力を語っているからである。

語り手は、自らが支配者の側にいることも、それにともなう様々な倫理的な問題も充分承知しており、時代錯誤な言説が詩的に語られているわけではない。周到にさまざまな条件をつけただ上で、個人的な物語という枠組の中で〈大連〉の魅力を伝えている。しかし、その〈大連〉を〈植民地〉と呼んでいる以上、個人的な物語の枠内には収まることはない。まるで、戦争の愚かしさを熟知しながらその魅力を語つた坂口安吾の小説のようである<sup>3)</sup>。

したがつてそれは、体験者泣かせでもある。

少なくとも表面的には甘い感傷にひたつた文章である。戦後になつてからみずからの甘い感傷を乗り越え、意識を転換させた者にとつてそれは、古傷を剥きだしにされて居直つていゝ様子を見せつけられたようで、腹立たしい気持ちになるのではないだろうか。とりわけ、引揚げで苦労した人にとつては、そのことについての言及があるとはいえ、にわかには共感できないのではないかと想像される。

さらにそれは、(未来の)読者としての中国人(特に大連在住の)を黙殺している。

未だに植民地支配を肯定している日本人がいる、という話になりかねない。

そもそもこのテキストは、読者の誤読を怖れていない。「美しい植民地」が回想されたとき<sup>3</sup>、もしも戦争に負けていなければ、という仮定が導かれ、あの戦争は間違っていたが、間違っていない別の戦争があり得たかもしれない、そうすれば（あのフランスのように）植民地をもう少し延命させることができたのに、という夢想を導いてしまいかねない断片をもっているのである。

苦勞話だけではないということが伝わることにより、みんなが苦勞したわけではない、それにしては苦勞話ばかりきかされた気がする、そのように教育＝洗脳されたのかもしれない、という連想がどこかで脳裡をよぎり、裏切られたという気持ちさえ芽生えるかもしれない。もちろん、引揚げの苦勞話にしても、中国の読者からすれば、単に数十日の苦勞ではないか、ということにもなるのだが。

いずれにしても、主として受容のレベルにおいて、テキストの危険性は発生する。

川村湊のように、このテキストを断罪しておけば、そうした危険性は回避できるのかもしれない。だが、それでは文学が文学である意味がなくなるのではないだろうか。

あらかじめ定められた普遍的理念性に基づく小説ほど面白いものはない。普遍的理念性という代物は、教育やメディアにおいて、黄門様の印籠のように控えているのであり、私たち

は、半ば無意識にその時代時代の正当性の確からしさを信じてり、疑ったり、解放感を抱いたり、抑圧を感じたりしているのである。正当性の確からしきやその表現は、いつの時代においても、一定程度正しく、一定程度は間違っていたと事後的に検証されてきた。そこに文学がかかわる役割もあるのではないだろうか。

植民地の魅力は、十分に知っておく必要があるのである。

## 注

(1) 成田龍一の歴史家的分析は、上野千鶴子と川村湊との鼎談「戦争はどのように語られてきたか」（週刊朝日別冊『小説TRIPPER』一九九八・六）の冒頭で示されている。

なお川村湊は、「異郷の昭和文学―『満洲』と近代日本―」（岩波新書、一九九〇・一〇）の中で、「アカシヤの大連」に言及して、ここでの大連が「郷愁や懐郷につながるもの以外のすべての要素を捨象したところで浮かびあがる幻影としての町の姿」にほかならず、客観的に外的状況を捉えて顧慮したり気を配ったりしていないと述べている。また、清岡卓行の大連も安西冬衛の大連も中島敦の大連も、「政治、文化、言語の角遂と葛藤の場としての植民地」という本質を見定めることがすっぱり抜けている」ために個人的で偏向したものになっているという批

判を条件をつけた煮え切らない語り方によって繰り広げている（実質は、舟橋聖一の選評に近い意見である）。

それに対して渥美孝子は、「植民地の子供」ということ―清岡卓行と原口統三の〈大連〉―（『昭和文学研究』

第34集、一九九七・二）において、川村の指摘の正当性を認めつつも、「留保」を求めている。そして、川村が前提としている一種の結論としての「普遍的理念的なもの」が孕む陥穽を想定し、危惧の念を表明している。植民地をめぐる議論における「本質」論は、「一定の視座へと強制することになりはしないか」という危惧である。控えめではあるが、渥美の問題意識の底には、「故郷喪失」が文学的言説であり続けてきたことと、「日本人」であることの問題をあわせて考える場の重要性の認識があるように思われる。

本稿は、川村の論に対する渥美の「留保」を継承し、「普遍的理念的性」に回収できない〈植民地〉言説、〈大連〉表象を、語りの現在と語られる時間の位相を考慮に入れて考察し、「アカシヤの大連」の断片的イメージを、できるだけ「外的状況」と結び付けて捉えなおそうとする試みである。

(2) 「アカシヤの大連」の〈彼〉が、実は〈花〉を比較していないという部分の考察については、松本菜月のレポート（『近代文学各論B』の課題として、二〇一一年一月十一日提出）に一部ヒントを得た。

(3) ジョン・ダワー著、三浦陽一・高杉忠明訳『敗北を抱きしめて…第二次大戦後の日本人』上下（岩波書店、二〇〇一）に、坂口安吾の戦争表現に対する同様の指摘がみられる。

(4) 遠藤周作は「清岡氏の大連、私の大連」（『清岡卓行大連小説全集』上巻月報、日本文芸社、一九九二・十二）において、安岡章太郎は「美しい隣の町」（同書）において、大連の美しさを肯定し、「美しい植民地」としての大連に思いを馳せている。これらの言説を奇異に感じてしまうほどに私たちは、紋切り型の戦後の平和教育に影響を受けている。その現象は、テキスト以上に危険である。

おそらく「ポストコロニアル」とは、植民地主義が政治的な局面以外のところに浸透し、植民地主義的な欲望を、半ば無意識に生活の中で満たそうとする者が蔓延している状況のことではないだろうか。